

「家計悪化」直撃の 高校進路指導現場

高校の進路指導・キャリア教育に関する調査

角田浩子「リクナビ進学キャリアガイダンス」編集長

リクルート進学総研が隔年で実施している「高校の進路指導・キャリア教育に関する調査」の結果がまとまった。進路指導の困難さは相変わらずで、困難の要因1位も前回同様「家計面の悪化」。今回の調査結果から、全国の指導現場の状況を俯瞰するとともに、高等教育機関側からの働きかけの方向性を考察する。

2012年 高校の進路指導・キャリア教育に関する調査
 <調査概要>
 調査対象：全国の全日制高校4898校の進路指導専事
 調査期間：2012年10月15日～10月31日
 (11月5日到着分までを集計対象とした)
 調査方法：郵送法
 回収数：1209
 有効回答数：1179
 回答者平均年齢：48.05歳

いま高校現場は

進路指導の困難度

9割が難しいと悲鳴

経年で聞いている「進路指導の難しさの実感」(図表1)。「非常に難しいと感じている」は4ポイント下がったものの「やや難しいと感じている」を合わせると91.2%と、前回同様9割以上の進路指導担当教師が難しさ

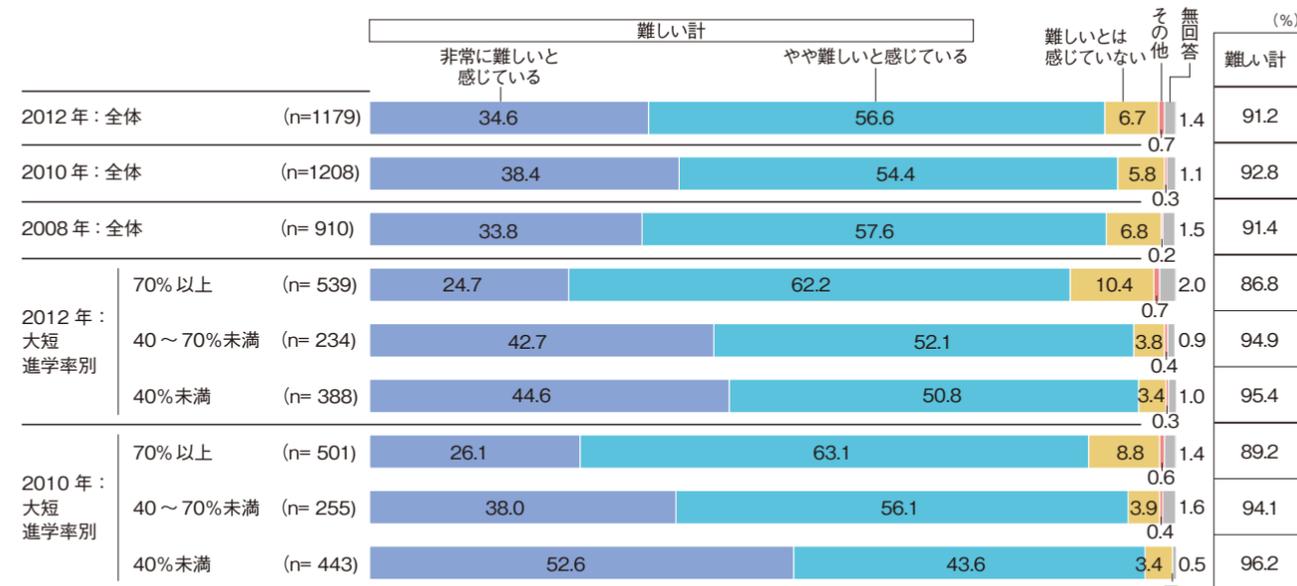
を感じている結果となった。大短進学率別にみると[40%未満]の高校で「非常に」の割合が8ポイント減少、[40～70%未満]の進路多様校では4ポイントの増加と、高校タイプによって状況が異なっている。進路指導の困難な状況が常態化するなか、多様校の悩みは一層深刻化しているようだ。

進路指導が困難な理由

1位は変わらず「家計面の悪化」

次に何が進路指導を難しくしているのか、困難な理由を見ていく(図表2)。生徒の問題、保護者・家庭の問題、学校側の問題、進路環境の問題など22の選択肢のなかで最も大きいと感じる3つを選んでもらった。全体では前々

図表1 進路指導を難しいと感じているか(全体/単一回答)



回の2008年には生徒の学習意欲の低下が1位だったが、前回今回とも「家庭・家族環境の悪化:家計面」が1位に。また、前々回・前回とも3位だった「生徒の「進路選択・決定能力の不足」が前回よりポイントアップして2位になった。次いで「学習意欲の低下」「学力低下」と生徒の問題が続き、5位は3回連続「教員の進路指導に関する時間不足」となっている。

これらも高校の大短進学率別に見ていく。大短進学率[70%以上]の進学校では前回まで1位だった「入試の多様化」を抑えて「進路選択・決定能力の不足」が1位となった。[40～70%未満]の進路多様校では「家計面の悪化」が前々回3位→前回2位→今回1位へ、[40%未満]の高校では、「家計面の悪化」が前々回1位→前回2位→今回また1位に。

フリーコメントを読むと「家計面の悪化」によって進学を断念したり志望先の変更を強いられている現実や奨学金など学費支援の必要性が浮かび上がってくるほか、適性や目標が見えずに進路決定できない、それ以前に基

図表2 進路指導が困難な最大理由(3つまで選択)(全体) (%)

進学率別	順位	2008年		2010年		2012年	
		理由	割合	理由	割合	理由	割合
全体	1位	学習意欲の低下	28.6	家庭・家族環境の悪化:家計面について	24.5	家庭・家族環境の悪化:家計面について	25.7
	2位	入試の多様化	26.7	学習意欲の低下	22.8	進路選択・決定能力の不足	24.3
	3位	進路選択・決定能力の不足	24.4	進路選択・決定能力の不足	21.5	学習意欲の低下	22.2
	4位	家庭・家族環境の悪化:家計面について	20.9	学力低下	20.8	学力低下	21.5
	5位	教員の進路指導に関する時間不足	20.7	教員の進路指導に関する時間不足	18.6	教員の進路指導に関する時間不足	17.9
大短進学率70%以上	1位	入試の多様化	39.7	入試の多様化	28.2	進路選択・決定能力の不足	26.9
	2位	学習意欲の低下	29.8	学習意欲の低下	28.0	入試の多様化	26.1
	3位	教員の進路指導に関する時間不足	24.9	教員の進路指導に関する時間不足	23.7	学習意欲の低下	23.1
	4位	進路選択・決定能力の不足	23.9	進路選択・決定能力の不足	21.0	教員の進路指導に関する時間不足	22.2
	5位	入試の易化	17.7	学力低下	17.2	学力低下	17.5
大短進学率40～70%未満	1位	学習意欲の低下	34.4	学習意欲の低下	27.1	家庭・家族環境の悪化:家計面について	36.0
	2位	入試の多様化	31.3	家庭・家族環境の悪化:家計面について	26.7	進路選択・決定能力の不足	27.5
	3位	家庭・家族環境の悪化:家計面について	24.6	進路選択・決定能力の不足	22.1	学習意欲の低下	25.7
	4位	入試の易化	23.1	入試の易化	21.3	学力低下	19.8
	5位	進路選択・決定能力の不足	22.6	入試の多様化	20.8	教員の進路指導に関する時間不足	19.4
大短進学率40%未満	1位	家庭・家族環境の悪化:家計面について	29.8	高卒就職市場の変化	36.9	家庭・家族環境の悪化:家計面について	31.4
	2位	進路選択・決定能力の不足	25.8	家庭・家族環境の悪化:家計面について	33.3	学力低下	27.8
	3位	学習意欲の低下	24.3	学力低下	27.2	高卒就職市場の変化	24.3
	4位	学力低下	19.1	進路選択・決定能力の不足	22.1	学習意欲の低下	20.0
	5位	職業観・勤労観の未発達	19.1	産業・労働・雇用環境の変化	20.0	進路選択・決定能力の不足	19.5

赤字: 2010年より順位が上がった項目 (最も大きいと感じるものを3つまで選択)

フリーコメント

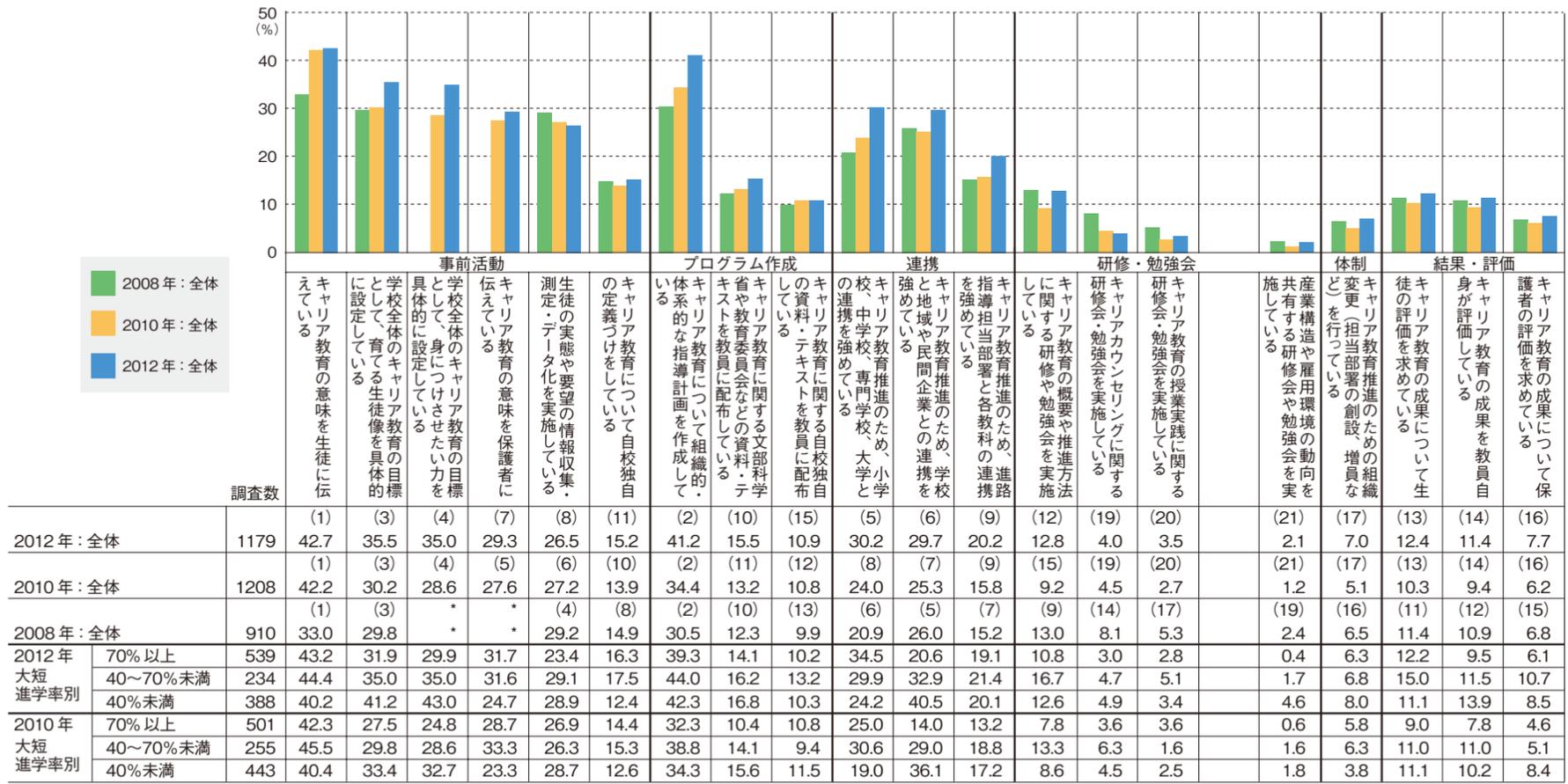
■ 家庭・家族環境の悪化:家計面について

- 【大短進学率70%以上】
- ・経済的理由から四年制大学へ進学できる実力でありながら短大を選択する生徒がいる。高校の授業料未納で進学以前の問題がある(南関東/普通)
 - ・保護者の年収を苦慮し、地元の大学へ進学希望の生徒が多い。特に首都圏への難関私立大進学者の減少(東海/普通)
 - ・収入が激減し、何らかの奨学金を受けないと、進学できない生徒が増えてきた(関西/普通)
- 【大短進学率40～70%未満】
- ・経済的理由により、進学をあきらめたり、奨学金を利用して進学することが非常に多くなっている(北海道/普通)
 - ・経済的問題について生徒と保護者間で確認できていないことがあり、推薦で合格しているながら辞退するようなケースがある(北海道/普通)
 - ・経済的な面から、自宅から通える大学、専門学校、就職先が、進路を決める第一条件になっている生徒が多い(関西/総合)

■ 進路選択・決定能力の不足

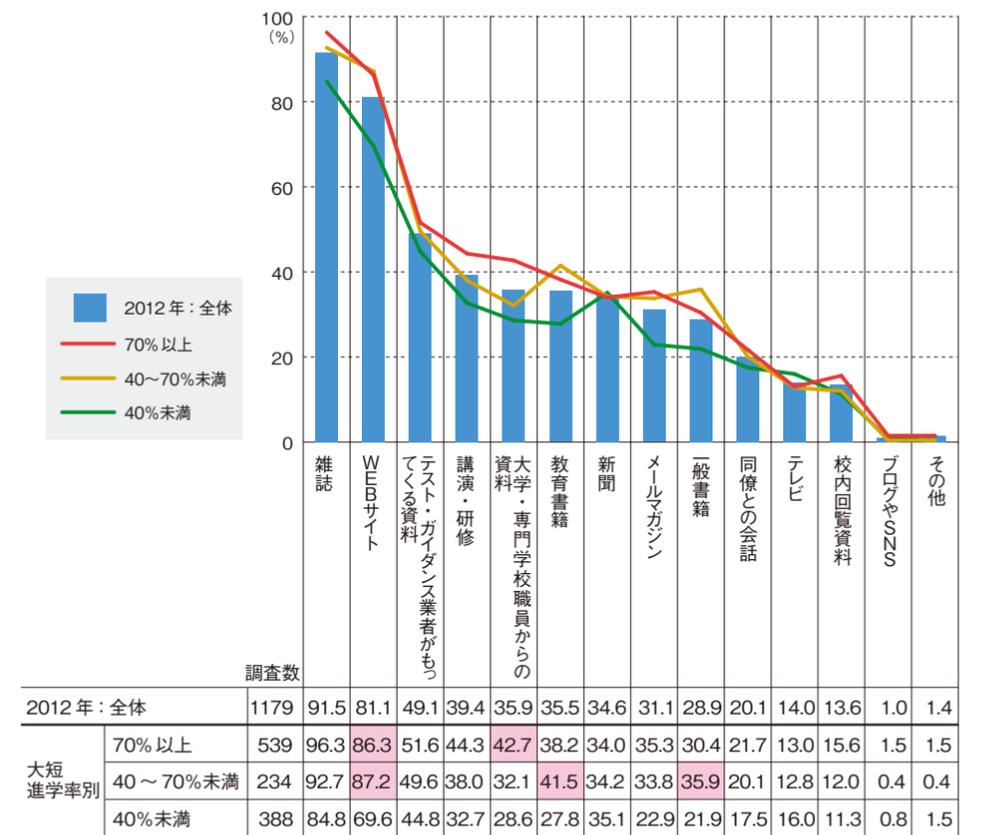
- 【大短進学率70%以上】
- ・外部からの情報過多の状況がかえって生徒の進路選択を難しくしているケースがある(北関東/普通)
 - ・答えや決定を求めてくる生徒(決断力不足)がいる一方で、受験直前になっても志望が見つからず探す努力もしていない生徒がいる(東海/普通)
 - ・自己の適性が見つけられず、進路先が定まらない生徒が増えている(九州・沖縄/普通)
 - ・自分が何をやりたいのか、何にむいているのかを考え、決定することができない。高3の夏すぎても学部を決定できない(関西/普通)
 - ・高望み、文理選択が適切でないなどで、実力と志望にギャップがある。また、急に高3の夏頃、進路を変える者もいる(南関東/普通)
- 【大短進学率40～70%未満】
- ・3年後半になってもコロコロ進路を変える生徒がいる(南関東/普通)
 - ・様々な講演や指導を通じて考える機会は与えられているが、自分のこととして捉えていないことや、まだ先のことで考えている(九州・沖縄/普通)

図表4 キャリア教育の推進状況 (全体/複数回答)



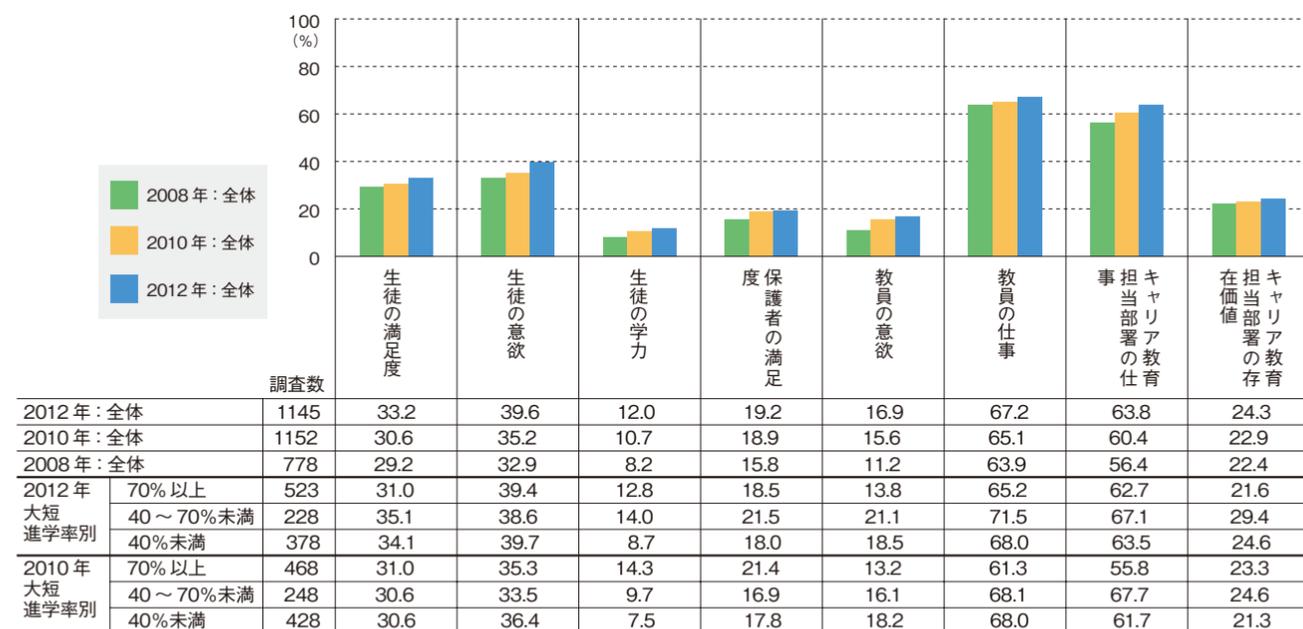
※各カテゴリーごと「2012年:全体」の降順ソート ※()内数値は全体順位 ※「*」は該当項目なし

図表6 進路指導の情報収集のために利用しているもの (全体/複数回答)



※「2012年:全体」の降順ソート ※「2012年:全体」より5ポイント以上高い数値に網掛け

図表5 キャリア教育推進によった「増した」割合 (キャリア教育実施校/複数回答)



高校進路指導教員の高等教育への目

● 生徒の進学先として重視する点

「面倒見の良さ」は教師だけ?

進路指導時に教師は大学のどのような点を重視するのかをたずねたところ(図表7)、トップは「学びたい学部・学科・コースがあること」81%、2位は「学生の面倒見が良いこと」60%。以下、「生徒の興味や可能性が広げられること」58%、「就職に有利であること」53%と続く。

大短進学率別にみると、いずれもトップは「学びたい学部・学科・コースがあること」。

スがあること」。[40~70%未満]と[40%未満]は2位が共通で「学生の面倒見が良いこと」となった。

また、高校生が進学先として何を重視しているかを比較すると、高校生の1位は教師と同様「学びたい学部・学科・コースがあること」だが、2位には「校風や雰囲気が良いこと」、4位には「自宅から通えること」などがあり、教師で高かった「面倒見が良いこと」は15%にも満たない。教師と高校生への訴求ポイントの違いは明確だ。

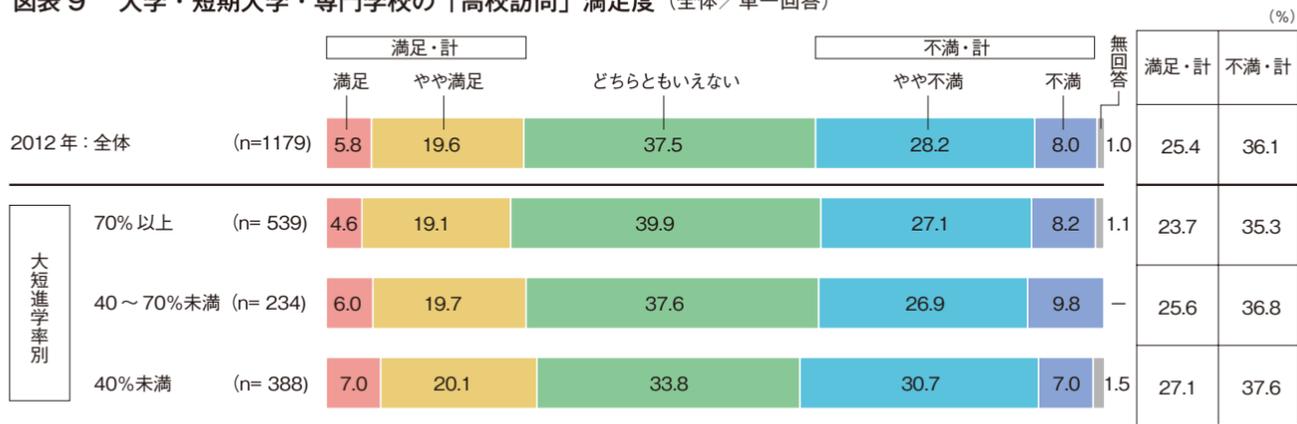
● 大学・短大への期待

「わかりやすい学部・学科名称」が1位

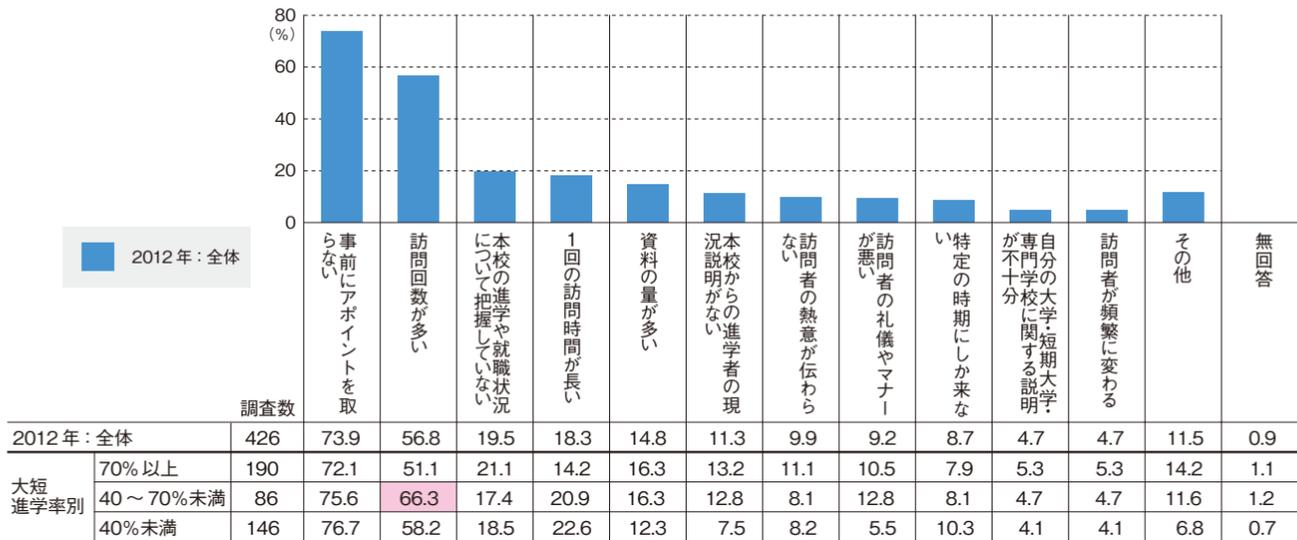
高大接続・連携の観点から大学・短大及び文部科学省に期待することをたずねたところ(図表8)、トップは前回同様「わかりやすい学部・学科名称」39%。2008年に1位だった「入試の種類の抑制」は前回同様2位だった。3位は今回新しく追加した「就職実績の公開」33%となった。

大短進学率別にみると、進学率

図表 9 大学・短期大学・専門学校の「高校訪問」満足度 (全体/単一回答)

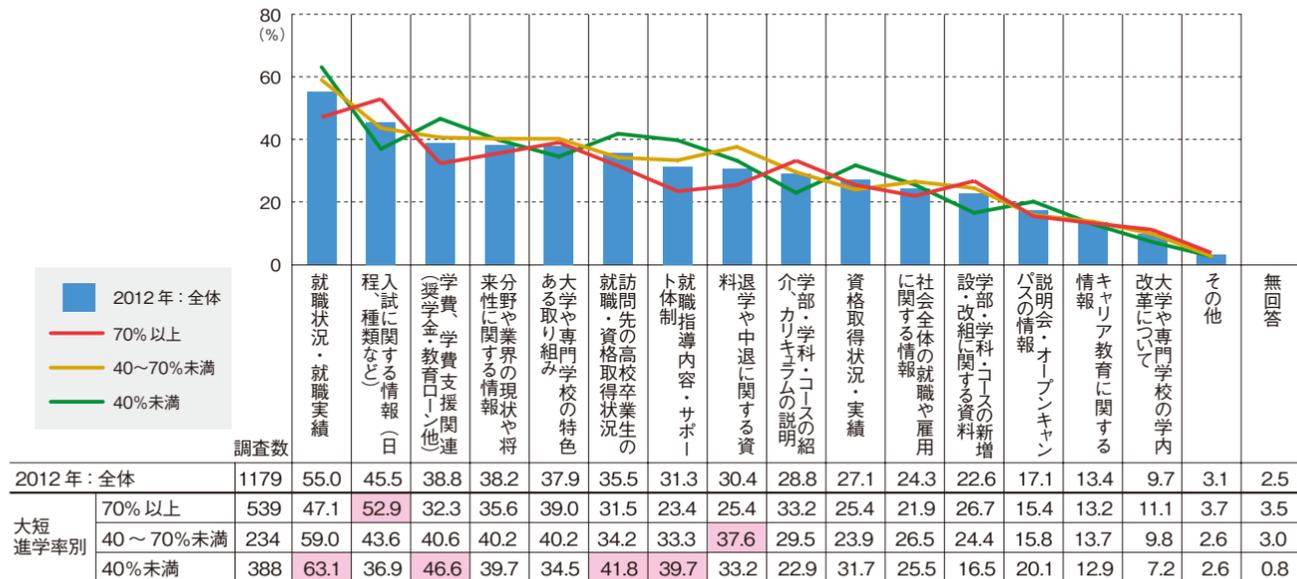


図表 10 大学・短期大学・専門学校の「高校訪問」不満理由 (「高校訪問」不満者/複数回答)



※[2012年: 全体] の降順ソート ※[2012年: 全体] より5ポイント以上高い数値に網掛け

図表 11 高校訪問の際に提供してほしい情報 (全体/複数回答)



※[2012年: 全体] の降順ソート ※[2012年: 全体] より5ポイント以上高い数値に網掛け

● 高校教師の秋入学賛成度

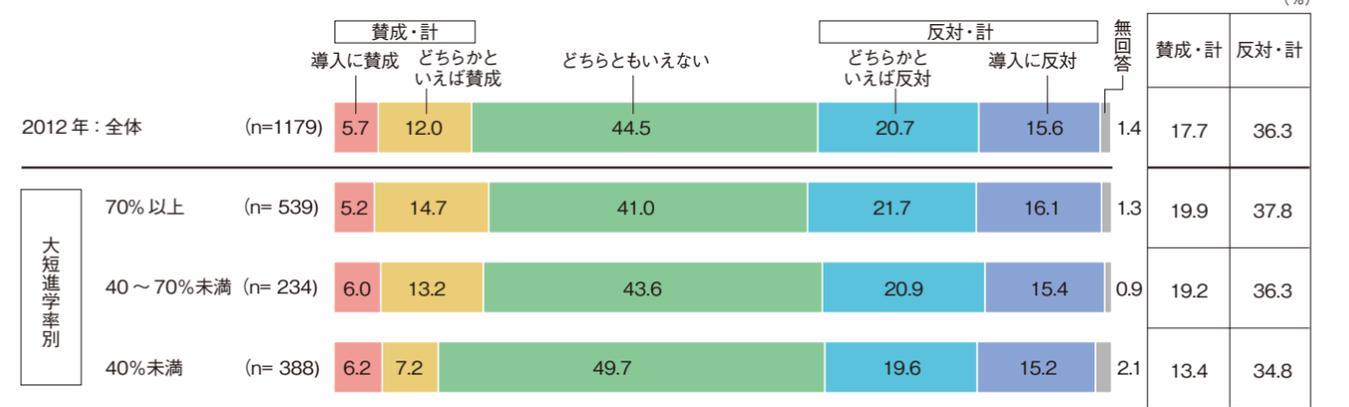
18% 反対は賛成の2倍の36%

昨年来話題となっている秋入学について賛否を聞いてみた(図表12)。「導入に賛成」と「どちらかといえば賛成」を足した「賛成・計」が18%。「導入に反対」「どちらかといえば反対」を足した「反対・計」は36%と、「反対」が「賛成」を20ポイント近く上回る結果となった。

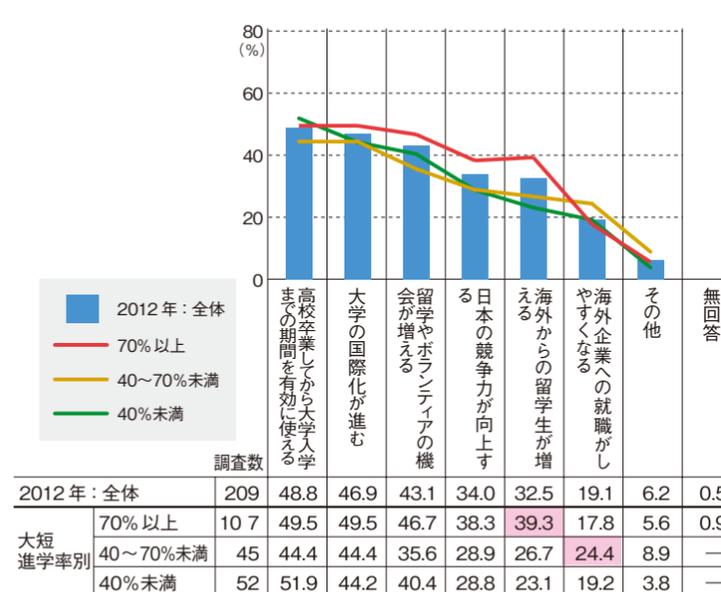
「賛成」理由は「高校を卒業してから大学入学までの期間を有効に使える」が49%でトップ(図表13-1)。「反対」の理由は「高校を卒業してから大学入学までの期間がムダ」の69%がトップとなり(図表13-2)、高校卒業後の半年間をどう捉えるかが評価の分かれ目となった。世間や高校生と比較して高校教師は慎重と言えるだろう。これ以上の入試改革には消極的ということかもしれない。

● 多忙感・疲弊感のある進路指導・キャリア教育の現場ではあるが外部との(特に大学との)連携は進んでいる。ところが現在のやり方では、大学からの訪問は必ずしも歓迎されていない。学費支援策など教師たちが生徒のために望んでいる情報を押さえてのアプローチが何より必要と言えるのではないかと。

図表 12 大学の「秋入学」をどう考えるか (全体/単一回答)

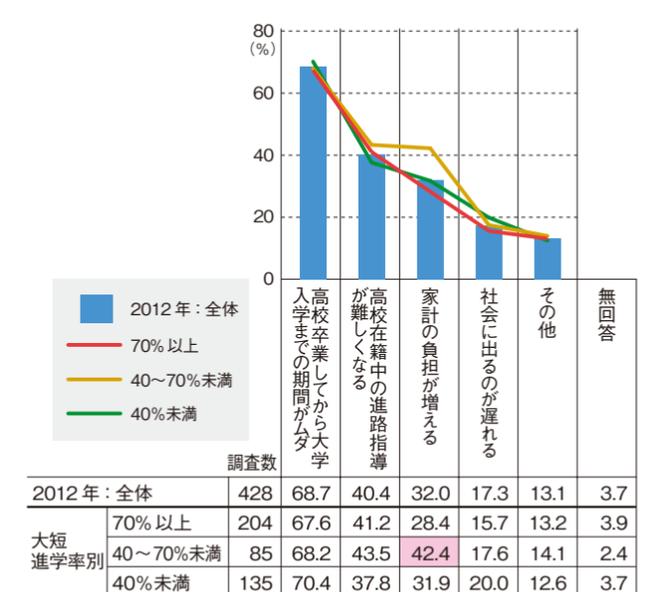


図表 13-1 「秋入学」賛成理由 (「賛成・計」ベース/複数回答)



※[2012年: 全体] の降順ソート ※[2012年: 全体] より5ポイント以上高い数値に網掛け

図表 13-2 「秋入学」反対理由 (「反対・計」ベース/複数回答)



※[2012年: 全体] の降順ソート ※[2012年: 全体] より5ポイント以上高い数値に網掛け